

|             |                                 |
|-------------|---------------------------------|
| 氏 名 (本 籍)   | 加 藤 純 一 (埼 玉 県)                 |
| 学 位 の 種 類   | 博 士 (体育科学)                      |
| 学 位 記 番 号   | 博 乙 第 1,527 号                   |
| 学位授与年月日     | 平成11年 3 月 25 日                  |
| 学位授与の要件     | 学位規則第 4 条第 2 項該当                |
| 学 位 論 文 題 目 | 柳生新陰流の総合的研究<br>一心法と技法の統一を中心として一 |
| 主 査         | 筑波大学教授 教育学博士 片 岡 暁 夫            |
| 副 査         | 筑波大学教授 医学博士 浅 見 高 明             |
| 副 査         | 筑波大学教授 入 江 康 平                  |
| 副 査         | 筑波大学教授 博士 (文学) 竹 村 牧 男          |
| 副 査         | 筑波大学教授 博士 (教育学) 大 戸 安 弘         |

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

### 1. 論文の構成

加藤純一氏提出の「柳生新陰流の総合的研究一心法と技法の統一を中心として」という題目の論文は、序章、第一章～第四章、終章、および参考文献からなっている。400字原稿用紙換算987枚相当のものである。

### 2. 論文の内容

本論の研究目的は、柳生宗矩『兵法家伝書』の読解より兵法論を解明すると共に、そこに展開される事・理不可分に捉えられる心法と技法の相即を明らかにすることにある。

一章では兵法思想の「習」にみる事理の統一について『兵法家伝書』の「進履橋」並びに「殺人刀 上」に展開する「殺人刀思想」「修学」「気論」「心論」「懸待表裏」「習」「型」と『習』の相即を中心に考察を行い、実践的側面と理念的側面と統一が図られていることを導きだした。柳生宗矩の兵法観は儒学や弾宗の心身観を受容し、その咀嚼のもとに実践論的展開を見せる極めて特徴的なものといえる。その実践論は「習」に収斂され、「習」に入り「習」を極め「習」を離れて「習」に違わずと言い切り、手足や身に所作はありながらも直接心が関与しない豁然貫通して何事も自由になる境地、心が何ものにも「着す」ことない囚われのない境地を求道し、それを形として表したものが型である。

そして、柳生新陰流では事的側面と理的側面が二分して存在するのではなく、型の実践のなかで相即的に統一されていることが明確にされた。

二章では、『兵法家伝書』の「活人剣 下」に展開する心身論、特に截相の場という特殊な時空間における対他の自己の心と身の関係について、「手字手利剣」「神」「身作り」「場の理論」「棒心」を中心に考察され、截相の場において相手を認知するためには、先ず己の神を「神妙剣の座」に捉え、それにより我が心、目、手足で相手を掌握すること、さらに水月の場という対峙時においては、心を下作に移し事前の準備を図り、油断なき状態を醸成すること、その場合には身手足は己の神に叶った動きができ技が繰り出されたとした理論が明らかにされた。則ち、互いに斬り合いを行う実戦の場という特殊な空間においても心法と技法が相即的な関係にあることを指摘した。

三章では、「活人剣 下」に併設されている「無刀之巻」に展開する心身の統一的把捉について、「無刀の理念と実戦」「機の理論」「転論」「神の儒学的解釈」より考察された。ここで帰結されるところは「敵に随い働く」

ところの己の心を窮めること、則ち対人的な自己を確立することにある。無刀の理論は、截られぬ間の熟知、截られる間に入ること、截らせて取ることの三つよりなり、相手の働きに随う「第二刀」の心持ちが核となる。機は、気の兆しの側面と心的側面の二つに分けられる。前者「枢機」に代表され、枢としての働きを有している。この機は善悪の峻別はするものの、その方向性や行為自体はそこに含まれず心と氣とを繋ぐ接点として心の一部に包摂され、しかしながら心一機一氣を明確に区別することにより、気の発現の契機としての働きが読みとられた。転論では「第二刀」に至る過程での相手の機を見ることの重要性が説かれる。「五観一見」を窮めること、則ち相手の拳や腕の働きを制しついに相手の神をも掌握することが説かれていた。このような截相の場という特殊な空間における心身観は宗矩の独自性が発露されたものとして理解され、己の神を神妙剣の座に捉えるという対他的な自己の確立により展開する新たな兵法であるとされた。

四章では、柳生新陰流の型について目録や伝書の詳細なる検討からその体系を明確にしている。流祖上泉秀綱の型を相伝した柳生宗厳は独自の型を付加し、さらに流祖の型を削除して合計九つの型をもって柳生新陰流の型を体系づけた。後世の被伝授者はこの目録の書式を基本的には踏襲するが、「九箇」の「睫径」の睫の当て字、「廿七箇条截相」の「破」太刀の太刀数並びに太刀順序に統一性が見られないことを指摘した。型の実践的側面では、他書との比較より考察がおこなわれ、結果として、時代と場所を越えて異なった使い方が存在し、ここに型の実践的側面においても変容がもたらされていたことを明らかにした。

則ち、武道においては心は重層的に捉えられ、それは截相の場という特殊な時空間が前提として存在するが故であり、ここに武道特有の心身観、心技統一の理論を見出している。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、柳生但馬守の兵法家伝書を対象にした研究である。新たな資料を発掘し、着実な解説をおこない、伝書に内在する思想を明らかにしたところに従来の研究には見られないオリジナリティがある。とくに近代化のなかで忘れられてきた人間の捉え方を、真剣勝負の場において鍛えられた日本の武術的人間存在の深さを明らかにすることによって再発見し、体育における今後の人間形成に意義ある示唆を与えたところに本論文の意義が認められる。なお、今後、本論文の思想内容を、かみくだいて現代の人々が接近しやすい表現をすることにより、体育界に広く貢献することが期待される。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。